

庚申講の話

— 庚申講 —

道端や神社・寺などで、庚申塔を見かけることがよくある。

それは石像であったり、文字を彫ったりしたものなど、さまざまである。

これらは、かつて盛んだった庚申信仰の表れで、全国的に多くの存在が知られている。

石像の主なもの、青面金剛（青い顔の色をした金剛童子）を浮き彫りにしたものが多い。これも「庚申」とか「庚申塔」などの文字塔と同様庚申の供養塔である。

仏教では、青面金剛を本尊とするが、神道では「猿田彦大神」としている。それは、庚申の「申」が（さる）を表しているからと言われる。

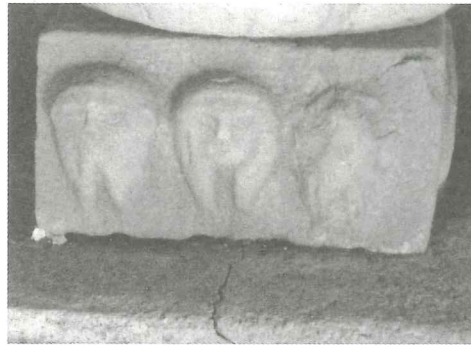


神田の庚申塔

（天和二年九月・神田村とある）
西暦では一六八二年になる。

像の下に見られる猿は、庚申様のお使いとされ、それが「見ざる」「言わざる」「聞かざる」の三猿信仰になったという。

また、上部の日月は、自然崇拜の表れとも言われている。



神田・庚申塔の三猿

— 庚申信仰の由来 —

庚申信仰は、奈良時代に仏教などと共に渡来した「道教」の思想によると言われる。

これによると、人間の体の中には「三匹の虫」という三匹の虫がいて、庚申の夜に限って、人間が寝ている間に身体を抜け出して天に昇る。そして、天にその人間の悪事を告げる。

天帝は、その内容によって、その人の寿命を縮めたり、死後

に地獄や餓鬼、畜生の三悪道に落ちいらせるといふ。

そこで考えられたのは、庚申の夜は、一晩中起きていようことであつた。

これは、平安時代に貴族から始まった行事で、室町時代になると、民間にも広がり始め、江戸時代には全国的なものになつたと言われる。

ちなみに、当地方の庚申塔は江戸期の貞享年代のものが多く

— 神田の庚申講 —

神田の庚申講は、明治初期には全戸（およそ五十八戸）「振草村誌」が講中であつたという。

しかし、年六回（旧暦庚申の夜の度に、米三合を持ち寄る負担などもあつて、だんだん抜けたり、止めたりするようになり、現在、有志による六戸までになつている。

昭和十二（一九三七年）、庚申の掛け軸を改装した時の記録では、十二名の名がある。

この当時の講は、飲み食いだけでなく、頼母子講的なものや相互扶助的な組織でもあつたらしい。

講仲間、少しずつ資金を出し合い、山を購入して、この山は「庚申山」と呼ばれている。庚申講は、回り番で「頭宿」と

うやど）を決め、その家に集まつて行つた。掛け軸に、庚申団子やお酒、洗米、味めしなどを供えた。

そして、先達から順に立つて「南無青面金剛童子」と、一人一口唱えた。

その後、出席者合わせて百回唱えればよいこととし、立つたり座つたりや、徹夜もしなくなつた。

なお、少し前までは「なむしよめんこんごうどうじ」と唱えていたが、「せいめん」が「しようめん」に訛つたものと思われる。



庚申・伊勢・秋葉講の掛け軸

また、この講は終戦前後の食糧難当時、中止されたが、その後、年の初めの庚申か、その年の終わりの庚申（いずれも旧暦）の夜、伊勢・秋葉の掛け軸も同時に祀るようになり、それぞれに唱えごとをしている。

さて、現在六戸での庚申講であるが、高齢化もあり、頭宿での講はできなくなつた。

そこで、六戸順番に、一年に一度庚申の日に、その家だけで祀ることにしている、講元来の姿は、今はなくなつていく。

（設楽町文化財保護審議会委員
金田喜兵衛）